

根株移植について

1. 根株移植とは

根株移植とは、樹木の幹を地表付近で切断し、幹の一部と地下の根茎とを掘り取り、目的の植栽場所に移動して植え付ける植栽手法である。

一般的な樹木の植栽（移植）では、水分を消費する幹や枝葉が存在するため剪定等を行って、地中との水収支のバランスを保たなければならないことや、幹や枝葉の存在が移植の実施時期を限定するなど、多くの制約がある。

根株移植は、こうした制約を伴う幹の大部分と枝葉全体を取り除くことで、水分需要を軽減するとともに、移植実施適正期間の拡大や目的地への運搬及び施工性の向上が期待でき、これまで比較的環境条件の良い内陸の宅地造成工事等で実績がある。

しかし、根株移植には、初期段階において地表付近からの萌芽枝が雑草と競争関係にあるなどの課題もある。今回の実証試験では、地上1.2m付近で幹の切断を行い、移植後の課題に対しても検討を試みる。

（臨海部埋立地で根株移植を行う意義）

埋立地など臨海部での緑化にあたっては、内陸地で育てられた苗木の植栽が一般的であるが、こうした苗木は育ってきた環境条件に適合する遺伝子を受け継いでいるため、臨海部の厳しい環境条件には合わずに枯死する場合がある。

一方、臨海部における緑地は、港湾整備事業に基づく港湾緑地や企業緑地などを合わせると全国で約1200箇所に及んでおり、維持管理のため密生した樹木の間伐が行われている。

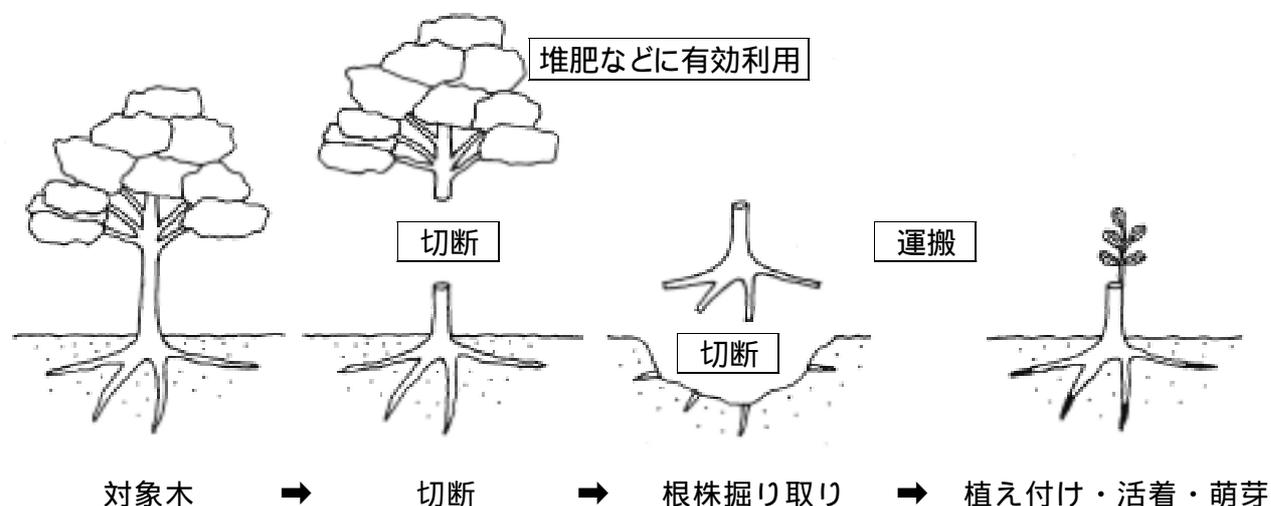
このため、港湾における廃棄物海面処分場跡地の土地利用として計画されている面積規模の大きな緑地の整備にあたっては、コスト縮減や早期の植生形成などの観点から、周辺緑地の間伐対象木を活用した根株移植が有効な視点として考えられる。

さらに、切断した地上部の幹や枝葉はチップ状とし、堆肥化して、植生の成育基盤の改善などに有効利用することで「緑のリサイクル」を促進できる。



間伐木の根株からの萌芽（参考）

2. 根株移植のイメージ



根株移植模式図